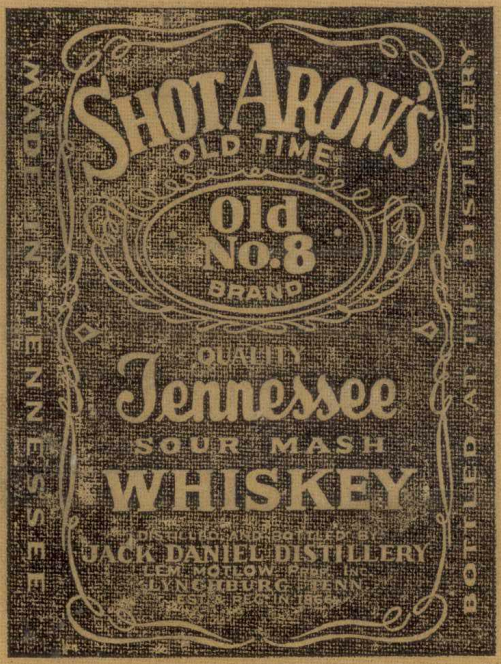
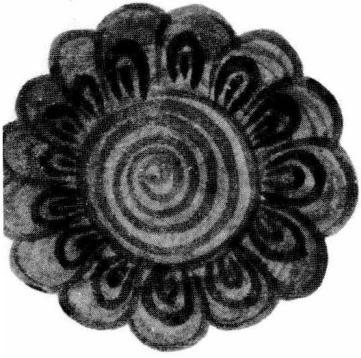

SHOT ARROW'S
OLD TIME
Old
No. 8
BRAND
QUALITY
Tennessee
SOUR MASH
WHISKEY
JACK DANIEL DISTILLERY
LEM MOTLOW PROP. INC.
LYNCHBURG TENN.
ESTABLISHED IN 1866
MADE IN TENNESSEE
BOTTLED AT THE DISTILLERY

アメリカ感情旅行

安岡章太郎全集 VII



安岡章太郎全集 Ⅶ
アメリカ感情旅行
昭和四六年七月二四日 第一刷発行

著 者 安岡章太郎
発行者 野間省一
発行所 株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一
郵便番号 一一二
電話(九四五)一一一一(大代表)振替東京三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社
製本所 藤沢製本株式会社
定 価 一二〇〇円

© Shotaro Yasuoka 1971, Printed in Japan
乱丁本落丁本はお取り替えいたします。

0393-135579-2253 (0) (文1)

安岡章太郎全集Ⅶ

アメリカ感情旅行

目次

アメリカ感情旅行　7
わがアルト・ハイデルベルヒ　213
ソビエト感情旅行　281
解説
シュラ場の野次馬　小田　実　505
安岡章太郎年譜　499

装幀＝田村義也

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

安岡章太郎全集Ⅶ

アメリカ感情旅行

アメリカ感情旅行

I　ある劣等感

一九六〇年　十一月二十七日　ニューヨーク

私は羽田を十一月二十六日午後十一時五十九分発のパン・アメリカン機でたち、翌二十七日午前七時にニューヨーク国際空港に到着した。日附のうえからいえば七時間の飛行ということになるが、勿論これは時差のいたずらで、実際の所要時間はハワイとサンフランシスコでの休憩時間をふくめて二十二時間ばかりである。しかし、ここでは二十二時間と七時間とは大した差ではない。どっちにしても、おそろしい速さというほかはないからだ。夜と昼とがゴッチャになり、プラスチックの皿にサンドイッチとレタスのサラダをもり上げた食事を、めまぐるしく何度も食べさせられるうちに、時間は一切溶解して、ただの記号にすぎないものになってしまう。飛んでいる間、ジェット機は空に貼りついたように何の動揺もない。窓から覗くのは単に薄ズミ色の物体であって、空とも陸とも海とも名づけようがない。機内には最初、焦臭い葉巻のにおいがただよ

っていたが、やがてそれもタバコという生活的なものから、何かしら抽象的な重苦しさに変ってしまう。いったい何のための重苦しさだろう？　「異人」や「毛唐」にとりかこまれているという不安だろうか。そういえば羽田の空港で税関の検査をうけるために待合所の階段を下りたときから、この不安ははじまっていた。フィリッピン人だろうか、航空会社の制帽をかぶった日灼けした男が、鳥の啼くような不思議な日本語で私に事務的な指示をあたえた。ふだんならそのカタコトの日本語は愛嬌のあるものに聞えたかもしれない。しかし私にはなんとなく怕い気がした。はじめて小学校へ上った日に大きな下駄箱の前で靴をはきかえたときの気持、兵隊にとられてシャバから一歩、営門に足を踏み入れたときの気持に似ている――。

奇妙なことだが、こんどロックフェラー財団の留学生として渡米することについて、私は自分自身でそれをのぞんでいるという心持になることがほとんど出来なかった。誰かが私を推薦してくれ、その結果自分は一つの役目をおびさせられたのであるという気がした。だから財団当局に呈出すべき書類の用紙に APPLICATION（願書）という文字が刷りこんであるのを見たとき、狼狽とも逡巡ともつかぬ一種の当惑をおぼえた。無論これは手前勝手の思い違いであって当惑する方がどうかしている。しかし「志願」という言葉で自分の行為を律する習慣は、われわれにはあまりナジミがないのではなかろうか。私自身について言えば日常茶飯のたいていのことは心ならずもやっている。心ならずも朝早く起き、心ならずも電車に乗り、心ならずもキョロキョロと空席をさがし、心ならずも上役にオベッカをつかい、また心ならずも小説を書きはじめ、心ならず

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

もツマらぬものを活字にし……、といったあんばいだ。これは私が責任感に欠けた男だからだろうか、それともこれまで責任をとろうにも責任のとりようのない社会に生きてきたからだろうか。どっちにしても私は、APPLICATION の用紙をつきつけられると、もはや言いのがれのすべもない立場にたたされてしまった。そして、いまやパン・アメリカン機に乗りこんだおかげで、この「心ならずも」の世界から決定的に訣別しなくてはならなくなった。今後、私には一切の言い訳も弁明も許されない。茶碗を割って「すみません」と言ったら、たちどころにそれを弁償する義務を負わされる、人と会う約束をしたら一分一秒おくれるわけには行かぬ、食事をするときにはナイフを右手にフォークを左手に、いつもシッカリにぎりしめシッカリ食う気で食わねばならぬ、等々。私の周囲には無数の、ありとあらゆる有形無形の義務感やら責任感やらが、一時にどっと押しよせて身の置きどころもないほどだ。

もっとも、そうした不安や緊張も、その場ではほとんど意識していなかった。ただ眠いはずなのに眠ることもできず、ときおり隣の席で女房が子供の名をつぶやいて涙ぐんだりする声に、うっとうしく憂鬱な気分におちいっていただけである。

私のななめ左の席には、としとった日本人の男がひとり坐っていた。上衣をぬぐと黄ばんだワイシャツの腹に黒いヘコ帯をまきつけている。椅子の下には、大きな風呂敷包みだの、竹の籠だのが、足の踏み場もないほどつみ上げてある。故郷へ錦をかざった「一世」のかえり旅なのだろうか。渋紙色の首筋を真直ぐ前へ向けたまま表情一つうごかさないこの男に、私は何か頼もしげ

なものを感じた。海外へ旅行すると、たいていの男が愛国者になるというのは本当らしい。私も、この老人が周囲に超然と日本人らしさを発揮している点に感銘をもよおしたのである。しかし、やがてこの老人がモソモソと前の座席の背中についている袋をさぐって、あたりはばからぬ音をたてながら嘔吐しはじめると、また何という理由もなしに幻滅を感じさせられた。

ハワイは夢の島だという。しかし私には、これはむしろ悪夢じみた印象しかなかった。赤茶けた砂漠のような飛行場、熱風にあおられている葉の枯れた椰子の木、ズダ袋のようなおかしな服をきた日系人の女たち、大声で叫びつづけるラウド・スピーカー。そんな中で私たちは冬の外套を着たまま、入国と税関のしらべをうけるために、立派な馬小屋のような汗臭い建物の中で二時間ほど立たされた。

"Can you speak English?" いきなり役人風の男に訊かれた。ギクリとして、「すこしぐらいなら」とこたえると、「では、この男の通訳をしろ」という。見ると、さっき飛行機の中でへどを吐いた爺さんが口もとにアイマイな笑いをうかべて立っている。何でも、これからブラジルへいくのだが、ハワイで五時間ほど休みたいのだそうだ。役人はこの爺さんにブラジル行きの飛行機の時間を教えているだけのことだったから、通訳は簡単にすんだ。けれども、生れてはじめての海外旅行で、最初の会話が「キャン・ユー・スピーク・イングリッシュ」だったことは、私にはショッキングな事件にちがいなかった。——いよいよ、これからは日本語のつうじない世界に入るのである。

あれから、もう何時間ぐらいたっただろう。国際空港からイースト・リヴァーをわたって、このマンハッタンのほぼ真ん中あたりにあるホテルに運ばれたのは、やっと夜が明けたばかりの時刻だった。モヤに包まれて半分水につかったような住宅街、二階建のトンネルみたいなハイ・ウェイ、丸ビルを三つか四つ積み重ねたよりもっと大きそうな精神病院、時速六十マイル以上のスピードで走るタクシーのなかで、黒人の運転手がうしろのわれわれを振りかえりながら、そんなものを説明してくれる。言葉は半分ぐらいしかわからなかったが、ヘタに訊きかえすと車が衝突しそうな気がして、好い加減にこたえる。

"This is New York City." 見晴らしのきくカーヴにさしかかると速度をゆるめて、運転手は声たからかに言う。ねずみ色の空を背景に摩天楼が銑眼のような凸凹のシルウェットを浮かび上らせているのである。

「オウ」私たちは英語風の発音で感嘆詞を発したが、じつのところ不思議なほど何の興味も感動もない。これまで映画や写真で同じものを何度も見すぎているからだろうか。しかし絵で記憶している景色の実物に接すると、また別の感動がわくはずだが、そんなものもない。建物だけではなく、鳥打帽をかぶった大男の黒人の運転手もまた、これまでに何度も出会ったような気がする。ひとの好さそうな笑顔といい、カスれかかった甘いような温いような声音といい、あんまり想像どおりの人物なので、彼の話していることがみな芝居じみて感じられるほどだ。そんなことより

私に実感として訴えてくるのは、広びろとしたタクシーの床が、タバコの吸い殻や、吐き散らされた痰唾に汚されていることだ。同じ小穢い車といっても、これは東京のタクシーとは異った汚れ方だ。

「このぶんだと十ドルぐらいとられるかしら」女房がメータアを見つめながら日本語でささやく。仮に十ドルとられるとすると、一割五分のチップをふくめて十一ドル五十セント、いったい日本円ではいくらぐらいになるだろう？　だが、車がマンハッタンに入ってからは、メータアの上り方はそんなにひどくなかった。十ドル紙幣でだいぶおつりがきた。それとホテルの入口がおもったほど立派でなかったことは、やっぱり私を安心させた。これなら私が東京で仕事のとき何度か泊りこんだホテルと大して違わない。ただこちらの方は高さが二十何階もあるというだけのことだ。案内された部屋は、まだ黒人のメードが掃除をしている最中だった。シングルのベッドが二つに、用箪笥、だいぶ古ぼけたテレビの受像器。窓の外には隣のビルの屋根が見下ろせて、その上を陰気な鳩が三、四羽、歩いている。すると私は何故ともなく、きょう十一月二十七日が日曜日だということに気がついた。私を招んでくれた財団のオフィスも、きょうは休みにちがいない――、そう思うと突然、これまで忘れていた疲労が体のすみずみまで拡がってくるのを感じ、いまシーツを取りかえたばかりのベッドにもぐりこむと、そのまま夢も見ずに眠った。

ところで、いまは何時だろう。あたりはすっかり暗い。しかし、けさだって電灯をつけなければ字も読めないほど暗かった。起き上って窓から外を覗いてみる。さっき鳩の遊んでいたビルの

あたりは井戸の底にしずんでしまったように何にも見えない。やっぱりもう夜だ。

「外へ出て何か食べよう」

となりのベッドの女房を揺り起こしたが、まぶしそうに眼をあけて「いまは何も食べたくない、外へ出たらビスケットでも買ってきて」という。勝手なことを言う奴だ。私だって別に腹がへっているわけではない。ただ、こうやってアナグラのような部屋にじっとしているのが落ちつかないまでのことだ。

「じゃ、いい。君はひとりで寝ていたまえ」

「気をつけて。道を迷って帰れなくならないように」

そんな馬鹿なことが、と思ったが念のためにホテルの番地と略図のついたマッチをポケットに入れて行く。だが、ホテルの外に一歩出ると、とたんに言いようもなくタヨリない気持になってきた。ここは一体どこだろう。ニューヨーク、西、五番街、五十一丁目。ホテルのマッチにはそう書いてある。しかし、それは文字の羅列であり、そんな抽象的な架空な場所はどこにもないような気がする。暗い河に似た人の流れは、どこの都会にも共通したものだろう。しかし彼等は私にとってまったく無縁の存在だ。軒をつらねてギッシリとたちはだかっている建物も、ただの倉庫か丈の高い塀みたいなものと変りない。東京の街中にいてもこうした孤独感がないわけではない。しかし、いまここにあるのはそういう「孤独」の源泉みたいな、したがって東京のそれにくらべて幅も厚味も何層倍もありそうな感じのものだ。とにかくどこかへ向って歩き出さなくてはいけ

ない。横断歩道の信号灯がまたたいている。そっちへ行こう。赤い豆電球が WAIT という字を点滅させている。WAIT これは私がこの街ではじめて出会った意味のある言葉だ。やがてそれは青い WALK に変る。私は歩きはじめる。

道をわたった最初の角にコーヒー・ショップがあった。ガラス戸ごしにスタンドに腰かけた人の姿が見える。扉のそばまで行ったが入るのはよした。ニューヨークまできてわざわざこんな店へ入ることもないだろう。そのかわり、そこから一丁ほど行ったドラッグ・ストアでフィルムを買った。二ドル三十五セント。五ドル紙幣をわたすと、頭の禿げたおやじが紙袋に入れたフィルムを、「二ドル三十五」と言いながらよこし、次に私の掌に、「四ドル三十五」と言って一ドル紙幣を二枚おき、さらに何枚かの銀貨をそのうえにのせて、「これで五ドルです。ありがとうございました」と頭を下げる。アメリカの商人の妙に念入りな釣り銭の出し方には感心したが、紙袋の口をクシャクシャにまるめて差し出す手つきの不器用さにはアキれかえる。しかし何よりも私は、この買物が円滑に行ったことで気を良くした。はじめてお使いをたのまれた子供が、お母さんにほめられる気持だ。自信がわいてきたせいだろう、あちらこちらに照明をあてた大きな看板が目につきだした。曰く、

音楽劇「マイ・フェア・レイディー」
ジョン・ウェイン主演映画「アラモ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com